
さよならのうた。

鈴韻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよならのうた。

【コード】

N0973P

【作者名】

鈴韻

【あらすじ】

国立魔族学院北海道分校《柳》の4年生、萌の話。

雨が降った。

激しくはないけれど、確実に街を濡らしていく、雨。

魔法生物学の先生が、東京では春雨と言って降っているのか降っていないのかわからないような優しい雨が降ると言っていた。

霧雨とは違うのかな。

霧雨は優しくないのかな。

雨は嫌いだ。

私が好きなのは、真っ黒い雲が立ちこめてどんよりしているのに雨は降らない、空が我慢しているような、そんな天気。

こんな日は、みんな雨が降るのを恐れて外に出てこないから人が少ない。

校庭の芝生も、学校で一番大きな木の下スペースも独り占めできる。

今日の雨は、すぐにやむ気がした。

雨上がりの暗い空も、好きだ。雨が上がったなら外に出られるように、私は外に出る準備をした。

1 (後書き)

初シリアスに挑戦します。よろしくおねがいします m ((m

私は三崎萌。
みなぎめぐみ

国立魔法学院北海道分校《柳》の4年生。遅生まれだから、クラスメイト達よりも一つ下の15歳だ。

家は学校から歩いていける距離にあるけれど、全寮制の学校だから休みの日しか帰れない。

《柳》は日本全国の分校の中で一番大きな敷地面積を誇り、他の学校に比べて制服も可愛い……らしい。

ちなみに制服は女子はグレーと薄茶色のセーラー服、男子も同じ色のブレザー。

必修科目は数学、英語、国語、魔術（座学）、魔術（実技）。
選択科目は美術、音楽、体育から1科目以上、魔法生物、歴史、地理、魔法薬学、ドイツ語、フランス語から2科目以上を選択。
私は音楽、魔法生物、地理、フランス語を選択している。

部活は手芸部に所属している。

昔から編み物が得意なので、部活動は楽しい。

先輩や後輩とも仲は良いし、友達もそれなりにいる。

私の学校生活は、そこそこ楽しかった。

雨はやみ、私は鞆を持って寮の部屋を出た。

「また行くの？懲りないねー」声をかけてきた同室の梓に、曖昧に笑い返して階段を下りる。

いつもの木の下、予想通り人はいない。

私はレジャーシートを敷いて木の幹に背中を付けて座り、本を読み始めた。

ニケーリアの「哲学論」。

やっぱり哲学書は一人で読むべきだと思う。その方が余計なことを考えずに済む。

本を読むのは速いほうだ。この本も、先週図書館で借りてきてから2周目で、もうすぐそれも終わる。

と、ふと目を上げたとき。

視界に馬が入った。

校庭の芝生で、2頭のペガサスが人を乗せて、追いかけてこのようにすごいスピードで走っていた。

「ポ口部の人かな・・・」校庭に誰も出てこないのを良いことに、森の中から出てきたのだろう。

ポ口というのは、木槌みたいなのを持った選手がペガサスに跨り4対4でボールを相手のゴールに打ち合うゲーム。

この学校のポ口部はなかなか強くて、しょっちゅう全国大会に行ったりしている。

「速いなあ・・・あれ、女の子か」色の薄い方のペガサスに跨って

いる生徒をよく見ると、後ろにセミロングの髪をたなびかせていた。前のペガサスの乗り手にくらべてかなり小柄な気もする。ポロ部にはマネージャーの2年生の子以外女の子はいなかったはずだ。

「マネージャーの子も乗れるんだ・・・」
遠くて顔はよく見えないが、追いかけてこをする二人はとても仲が良さそうだった。

遠くで戯れる二人を見やりながらぼーっとしていると、また雨が降り始めてきた。

今度は最初から激しい雨だ。

凄い音がして、それからすぐに木の下まで葉を伝った大粒の雨が落ちてきた。

「あ・・・やば」本を急いで鞆にしまい、レジャーシートを急いでたたむ。

あまりにも激しい雨だったので、木の下を離れたときにはもう私の髪はびしょ濡れだった。

「・・・あちゃ」部屋に帰ったら梓に怒られるだろうな。

雨に当たるのは好きじゃないけど寮に戻るのもなんだか嫌で、私は土砂降りの雨の中をだらだらと歩いた。

今日の雨は冷たい。ポロ部の子たちは大丈夫なのかと思って彼らが走っていった方を見ると、男の子のほうは馬に跨ったまま、女の子は馬から下りて手綱を引つ張りながら歩いていた。男の子の乗っている馬が馬体と同じ茶色い翼を広げて女の子を雨からかばっている。

ぼーっと歩きながら彼らを見つめていると、女の子とふと目があつた。

「あつ」その瞬間、女の子が引つ張っていたペガサスの手綱を落とすしてこっちに走り寄ってくる。

「唯！」男の子はペガサスを止めて女の子の名前を呼んだけれど、彼女は気にも留めず子犬のような走り方でこっちに来ると、「風邪ひいちゃいます！こっち来てください！」と私の手をつかみ、私を連れてペガサス達の所へ戻った。

「ほら、ここ。これ以上雨に濡れたら体に障ります」そう言って彼女はさっきまで自分がいたペガサスの翼の下に私を押しやる。

「いや、あなたたちはどうなのよ」

「だからこれから暖まりに行くんです！部室、暖房ついてますからとりあえず服とか乾かさなきゃ！」鞍上の男の子は、ずっと無表情だ。たまにちらりと私の横の女の子を見やるだけで、私の方には見向きもしなかった。

そうやって引つ張られているうちに、私は校庭の森の中にある、ポロ部の部室に連れてこられた。

「ちょっとここで待っていてください！」部屋・・・と言ってもただの小さい小屋なのだが、二人は私をその中に入れてとまた外に走り出て行った。たぶん、馬装を外しに行ったのだろう。

部屋の真ん中にストーブが置いてあって、私はそれに当たって暖をとった。

少ししてから二人が鞍を担いで戻ってくる。

「あ、寒くないですか？暖房上げましょうか？」

「ううん、大丈夫大丈夫！なんか・・・ごめんね？」

「あーいえいえいえ！いいんですいいんです！こちらこそなんか勝手に連れて来ちゃって・・・お茶とかも何もなくて申し訳ないんですけど」そうやって話をしつつも彼女はロッカーを漁ってタオルを取り出し、私と、ベンチに座っていた男の子に手渡した。

「雨がやむまで待って、やまなくてもまあ傘があるんで、それで帰りましょう」

「うん・・・ありがとう。あ、えっと・・・何て呼べばいいのかな」

「ふほっ！？あ、私・・・あの、中野 唯っていいいます！何とでも呼んでください！」

「唯ちゃん、ね。私は三崎萌」私は後ろを振り返り、タオルで頭をがしがし拭いている男の子を見つめた。目を合わせて、首をかしげる。

「美並、亮」彼はぶっきらぼうで低く、でも聞き取りやすい不思議な声の持ち主だった。

「亮くん？綺麗な声だね」

「それは・・・どうも」嬉しそうにも見えないけど、話しかけられて迷惑という表情でもない。そして、よく見ると彼はとても綺麗な

顔立ちをしていた。

「そういえば、あなたたち校庭で何やってたの？」ふと思って唯ちやんに聞くと、彼女はばつの悪そうな顔をして亮君と顔を見合わせた。

「いやあ、ほら、あまりにも人が少ないから・・・ちよつとくらい外に出てもバレないかなあと・・・思いました。だから、その、ちよつと散歩がてら出てみようかなあ、と」

「つまり、こつそり抜け出して遊んでたと」

「うわあああつ言わないでくださいねっ！？先生には絶対に言わないでください！」唯ちゃんの慌てように私は声を上げて笑った。

「わかつてるって。雨宿りさせてもらってる恩もあるしね、誰にも言わない。ね？」

「あ、ありがとうございます！」

「なんだか、私たち仲良くなれそうだね」私が言うと、彼女は嬉しそうにはにかんだ。

5 (後書き)

次から視点変わります

就職先が内定した。

魔法警察の駐在署職員、つまりはお巡りさんってところだ。

「ってことで俺進路決まったから、また戻ってきちゃった」もう部長の座は後輩に譲ったが、俺は頻繁にポ口部に入入りして活動を続けていた。

「わーっ、おめでとうございます！警察官だなんて先輩にぴったりじゃないですか！あっさり決まって良かったですね！」後輩は喜んでくれた。母さんも安心したみたいだし、弟もどことなくほっとしているような気がした。

勉強していかないわけではないが、内定がなかなか決まらない他の同級生より時間に余裕があったので、部活に行ったり去年までやってたバンドの練習を再開したり、基本的に好き勝手生活している。

「宏司先輩がいなくなったら次のベース誰入れましょうね」

「適当に誰かつつこんどけよ。楽器置いてくからさ」

俺は美並^{みなみ} 宏司^{ひろし}。《柳》の6年生で、18歳。

今年の4月までポ口部の部長をやっていたが就職活動のため引退、内定が決まった今また復部してポ口をやっている。

バンドは去年、ポ口部のメンバーの数人で結成した。去年に入部してきた1年生が3人もギターとか歌がすごく上手くて、そのときの4年生にドラムやってる奴がいたり俺ももともとベースはたまに弾いてたから、ちょうどいいやということ組んだバンドだったが、これがなかなか楽しかった。

ツインボーカルで、そのうち一人は女の子。マネージャーの唯だ。もう1人は俺の弟の亮で、こいつはギターも弾く。数年前に俺が誕

生日プレゼントにギターを買ってやってから、亮は暇をみてギターの練習をしていたようだった。

曲のジャンルは基本的にロックっぽかったが、俺達は本当に何でもやった。

もともとうちの死んだ父親がオペラの歌手だから俺達兄弟はどちらかというとクラシック系の家庭に育っているし、唯は洋楽からマニアックな子供向け番組のテーマソングまで幅広い守備範囲を持っている。ギターをやってるもう1人の1年生である光はソウルとかR & amp ; B 方面が好きらしいし、ドラムの加藤は《柳》に入学するまでずっとジャズをやっていたらしい。

全然違うジャンルから集まった5人だから、どんなジャンルでもできた。

発表の場は学校祭の有志発表くらいで、あとは冬休みに知り合いのライブハウスで2回くらいやった程度だった。

それでも周りの反応は上々で、特に静かなバラードから激しいシャウトまでなんでもこなす2人のボーカルの人気は他のバンドからも声がかかるほどだった。

来月、俺にとっては最後の学校祭がある。予定されているのは4曲。最初と最後がハードロック系の曲で、2つ目が唯のソロボーカルのジャズ、3曲目が亮のソロのロックンロール。

最後の発表に向けて、必死にベースの練習中だ。

もともと朝は早く起きて勉強していたが、就職が決まって勉強しなくてもよくなつたので最近では朝起きてからポロ部の部室に行つてベースの練習をしたり、馬に乗ったりして2、3時間過ごしていた。最近では部室に入り浸りなのでベースも置きっぱなしだが、それは他のメンバーも同じらしく、ギターはおろかドラムセットまで部室に置いてある。

「ん・・・おはよ」今日は天気があまり良くないが、相棒のジュードが珍しく自分からすり寄ってきたので、散歩でもしようかと思う。「雨降つたら帰るからな。足跡ついたらさすがにやばいし」

この学校の建物は半分森に突っ込んで、その森の中にポロ部が部室として使っている小屋や、フィールド、馬場がある。他の学校はサッカー部やラグロス部のコート借りたりしてポロ専用のコートはないらしいので、かなり俺達は恵まれているのだろう。

フィールドの奥にもずっと森は続いていて、ペガサス達はそこに放牧している。さらに奥に行けば小さな川があるのはかるうじて知っているが、その奥までは道が存在しないので誰も入ったことがない。噂によると大きな谷に面した崖があるらしい。

ペガサスが行動できるのはその森の奥から、部室の手前の柵まで。彼ら自体は絶対にその域を出ることはないが、たまに俺が誰もいないのを見計らって外に連れ出したりしていた。

「ジュード、鞍付けるぞ」俺の身長は178センチで、ペガサスの平均身長（首の付け根までの高さ）は平均190センチ。載せやすいように鞍はかなり軽量化されている。ウエスタンスタイルの鞍だ

が、鐙や腹帯を合わせても総重量は2?足らず。
頭絡と手綱を付け、準備ができる都合で馬をしゃがませる。膝を
折って座った馬に跨って鐙に足をかけ、踵で馬の腹部をつつく。立
ち上がって前進させる合図だ。

ポロのルールは亜族のものともそこまで変わらない。

相手チームのゴール（2本のポールの間）に木製ラケット（亜族ではマレットという木槌を使うが、空中戦での命中率を上げるためにラケットになった）でボールを打ち込んで得点を競う。

全6セット（チャッカーともいう）で1セットは15分。セット数が引き分けの場合は総合得点の合計で勝敗を決める。

1度にフィールドに出られる選手は4人で、セット毎にメンバーは自由に替えられる。

亜族のものとは違い、魔族の俺達にとってポロはかなりポピュラーなスポーツだ。

プロチームもあるし、世界大会も毎年各国が開催場所として名乗りを上げたがる。

うちの学校のポロ部員は15人。うち一人はマネージャーの唯だが、彼女も練習試合とかではたまに馬に乗ることがある。

ラケットを振るうのが得意ではないらしく、やたらと空振りするが、乗馬だけなら能力はポロ部一だ。本職のプロは別として、唯より馬とのコミュニケーションが上手い奴を俺は見ることがない。だからこそ、入部を許可されたわけだが。

今まで女子の入部希望は多かったが、唯以前には一度も女子が入部したことはなかったらしい。

確かに、それまで（今でもたまにあるが）入部したいと申し出る女の子はなぜか動物嫌いだったり馬に触れることすら出来なかったり、やたらと部員に媚を売るだけだったり、何故入ろうと思ったのかわからないような子ばかりだった。

唯はちっちゃいしちよっと鈍いところがあるが、何より素直で馬が

好きだ。マネージャーとしての仕事以上にいろんなことをやってくれるし、慣れれば人懐っこいので部員全員の妹キャラと化している。最近は亮と付き合っている・・・なんていう噂も聞かすが、本人からは聞いたことがない。

それで、とにかく俺は朝っぱらからペガサスに乗って校庭をうろついていた。

木にぶつからないように上体を前に倒し、汗を掻かない程度のスピードでジュードをゆっくりと走らせる。天気は悪いが、雨が降るのはもう少し後になりそうだ。

視界に違和感を感じたのは、森を出て間もないところだった。俺が気付いてから数歩走って、ジュードもいつもと違うことに気がついたのか立ち止まって耳をピンと立てた。

構内で一番大きな、分校名の由来にもなっている柳の木。木の下で、幹に寄りかかるようにして女の子が寝ていた。

静かな驚きだった。しばらく俺は息をするのも忘れていたのではないだろうか。

我に返って、俺は離れたところから少女を観察した。

見たことのない顔だが、少なくとも唯よりは年上に見える。灰色がかった黒髪を背中まで伸ばしていて、さも幸せそうな表情で静かに目を閉じていた。まるで死んでいるかのようだ。

「・・・あれ、生きてる？」俺は急に不安になった。まさか本当に死んでいるなんて事はないだろうが、どのみちあんなハーフパンツとTシャツ一枚じゃいくら夏とはいえ風邪をひく。

俺はジュードをそつと柳の後ろに回るようにして走らせ、馬から飛び降りた。

「・・・おい、生きてるか？」しゃがみ込んで細い肩に手を置くと、

それは驚くほどに冷たかった。

「え・・・おい！起きろ！風邪ひくぞ！」いくら言っても、規則正しい寝息しか聞こえてこない。

「はあ」熱でもあるのかと思って彼女の額にそつと手を当てる。

「・・・めちやくちや熱いじゃねーか」あいにく俺もジーパンとTシャツしか着ていなかったのも彼女に掛けてやれるものはなかった。この時間だと保健室も開いていないはずだ。

高熱の少女をそのまま放っておけるわけもなく、俺は彼女を背負って、ジュードに後ろから付いてくるように言った。

部室のベンチに女の子を寝かせ、ちょうど洗濯したばかりの鞍下用の毛布が近くにあったのでそれを彼女の体に掛けた。目を覚まさないことを確認して、俺は外に出た。

「ごめん、外に出るのはまた今度な。また放課後来るから」じっと待っていていたジュードから鞍とハミを外し、首を軽く叩いてやる。彼はそのままどこかへ歩いていって消えた。

部室の壁に馬具をかけ直し、ちらりとベンチを見やる。

「・・・うおわっ」さっきと同じ体勢だったのでまだ寝ているのかと思いきや、目がぱっちり開いていた。黙って、動向を見つめてみる。

「・・・」彼女はしばらくそのまま静止していて、少ししてからゆっくりと体を起こした。

「デ、ジャブ？」半ば虚ろな目で俺の方を真っ直ぐ見つめて、首をかしげる。

「い、いや、俺に聞かれても」

「知ってる。ここ」

「はあ」

「そうか、夢か」彼女はそう言って、再び体を後ろに倒した。

「いやいやいやいや、現実だか・・・」「ごっん」と、俺が言い終わる前に柔らかな衝撃音がした。彼女の頭がベンチに思いっきり衝突していた。

「痛い・・・おかしいな」無表情だ。痛い、と言いつつの無表情だ。

「おい、大丈夫か」いろんな意味で。

「大丈夫だ、問題ない」しばらく俺を見つめた後、彼女は再び口を

開いた。

「私は木の下で寝てしまった気がするんだけど・・・何がどうして
どうなっただろうな。私は馬のおにいさんに拉致されてし
まったらしい」俺は彼女にここに連れてくるまでのいきさつを説明
した。

「ほお・・・それは・・・かたじけない」この子は常日頃からこういう言葉遣いなのだろうか。彼女はそのまま立ち上がるうとして、またしても無表情でへたり込んだ。

「どこ行くんだよ」

「部屋に、戻ろうかと」俺は時計を見た。

「今戻っても部屋の奴起こして風邪移すだけだろ。とりあえず俺は7時くらいまでここにいるつもりだから、それまで寝てる。7時になったら保健室に直接連れてってやるから」そつと彼女を抱え上げてベンチに再び寝かせた。頭の下に畳んだタオルを入れてやり、体に毛布を掛け直す。彼女は爬虫類のような視線を俺に向けた。

「お名前と学年・組・性別をどうぞ・・・」こいつは本当に大丈夫なのだろうか。

「美並宏司、6年1組、男。これでいいのか？」

「先輩ですかあ・・・私は・・・えつと・・・5年2組の・・・三崎萌です・・・たぶん」

「わかったからもうしゃべるな」女の子、もとい三崎は俺の言葉を無視して話を続けた。

「この前も・・・ポロ部の子に助けてもらったんですよ」

「・・・へえ」

「雨が酷くてですね・・・ペガサスの翼の下に・・・入れてもらってここまで連れてきていただいた・・・気が」

「あの柳から？」

「左様ですぞ」

「・・・」俺が黙っていると、彼女はそのまま話し続けた。

「曇りの日って・・・嬉しいじゃないですか。人が外に出てこなくて、どの木の下も枝の上も好きに使えて・・・それで、・・・先週？先々週？うーん・・・」要約すると、彼女が木の下で本を読んでいると森からペガサスに乗った男の子と女の子が現れて走っていたが、土砂降りになったから帰ろうと思っていたらその2人が拾ってくれてポロ部の部室で髪と服を乾かさせてくれた、ということらしい。

「美男美女・・・とはあのことですか。・・・いや、女の子は美女と言っより可愛いわんこみたいな・・・お陰で風邪をひかずに済みました・・・っと、あれ、誰にも言わないでって口止めされてたかも・・・」たぶん唯と亮だろう。放課後にあつたら嫌味でも言うてやろうか。

「大丈夫だ、俺もたまに外には出てるから。咎めはしないさ」

「それはよかったです・・・」

「うん、わかつたら寝てる」

「私も・・・ポロ好きでしてね・・・」結局、彼女は途切れ途切れに話し続けて7時まで目を覚ましていた。

「ああ、戻る時間ですねえ」壁の時計を見て、彼女が間延びした声で言う。

「そうだ。立てるか？」

「うーん」曖昧な返事をしつつも彼女は自力で立ち上がり、ふらふらしながらドアの所まで行った。

「保健室まで送るから」

「ほお・・・ありがとございます」倒れかけたらすぐに支えに行けるだけの距離をとって、俺はゆっくり彼女の斜め後ろを歩いた。

「ほれ、保健室」校舎にはいるとふわふわと寮の方向に行こうとする彼女の肩をつかんで、保健室に引っ張った。

「嫌いです」

「んなこと知るか」

「先輩も嫌いです」

「あっそ」

保健室のドアを開けて、わざと足音を立てて彼女を中に連れ込むと奥から先生が出てくる。

「おはよう。朝早くからどうしたの？」

「外で一晩過ごして風邪ひいたバカを連れてきました。治るまでここに拘束しておいてください」三崎萌は反抗する視線をこっちに向ける余裕さえないようだった。

「あらまあ」先生は彼女の額に手を当て、首周りを包み込んで脈を取った。

「そうね。しばらくここで寝てなさい。部屋に戻っても授業に行ける訳じゃないし友達に風邪移すだけよ」

「うう・・・はい・・・」

先生に背中を押されて三嶋は奥に入っていく、俺は用無しになったので保健室を出た。

次に三嶋に会ったのは、その次の週だった。

昼休み、食堂で偶然会った。俺は同級生の黛と野坂と一緒に、彼女は友達と二人だった。

彼女はもうすっかり元気そうで、俺と目が合うと丁寧に一礼した。

「あれ、あんなキヤラだったっけ・・・」

「え？何？」黛が俺の視線を追う。「知り合いの子？あんなのいたっけ？」

「ああ、この前早朝に木の下でぶっ倒れてたんだよ」

「なにそれ」彼は思いつきり笑った。今になって思い出すと自分でも笑える。

「一晩外で寝てたらしく見事に風邪ひいてた」

「そりゃそうだな。で、保健室にでも連れてったと」

「そういうこと」

「いい人じゃんお前」

「何を今更」そう言って笑っているうちに、彼女たちはすでに視界から消えていた。

次の日、いつものように朝早くから部室へ行こうと建物の外に出ると、そこに三嶋がいた。

「うおっ」

「おはようございます」

「・・・うん、おはよう」

「先日はありがとうございました」彼女は頭を下げ、俺にクッキーが入った小さな袋を渡した。

「どういたしまして。急にどうした？」

「友達に礼を言っただけと言われました。丁寧に」

「それはそれは。ご丁寧にも」

「あと、これ・・・」三嶋は俺に渡したのと同じような大きさの紙袋を2つ持っていた。

「唯ちゃんと亮君・・・でしたっけ。渡していただけませんか？」

「自分で渡せよ」「めんどくさい、というのが主な理由だったが、後で考えるとそうでもなかったのかもしれない。

「えっ」

「あいつらなら夕方の5時前には部室らへんにいるから。俺から渡したら向こうも気まずいだろう」

「あ・・・そうですね。出直します。では」

「うん。じゃあな」小走りで校舎に戻っていく彼女を見送って、俺はまたいつものように森の中に入っていった。

13 (後書き)

次から目線変わります

先輩にクッキーを渡して部屋に戻ると、同室の梓が起き出したところだった。

「あら、早いね」

「うん・・・あ、ちゃんとお礼言ってきたの？」もともと先輩にちゃんとお礼行つてこいと言い出したのは梓だった。私はうなずく。

「先輩にはちゃんと渡したよ。あと、放課後また出直すけど」

「え？」

「あの子達にも、直接渡したいから」

「ふーん」梓はそのまま再び横になった。

「じゃあまた寝るわ。起こしてね」まだ朝の5時。明るいけど、梓はいくらでも寝る子だから7時半くらいまで寝るだろう。

「うん」私は眠くなかったので机に向かって勉強を始めた。

勉強するといっても、最近はまだ学校祭前で準備ばかりだから授業も少ないしすることも大してない。

成績は中の上。この学校は前年度の学年末テストの成績によってクラス分けをするから、だいたいクラスを聞けばその人の成績がわかる。私は1年の時からずっと2組の真ん中くらいにいる。たぶんこれ以上上がることはないだろう。

学校祭は、3日間かけて行われる夏休み前の学校最大のイベントだ。私は所属している合唱部の発表の準備や全校参加の仮装パーティーの準備に追われていたが、それでもまだ周りに比べると暇な方だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0973p/>

さよならのうた。

2011年10月6日23時34分発行